

ブログ「アラビア半島定点観測」:<http://ocin-japan.dreamlog.jp/>

ブログ「内外の石油情報を読み解く」:http://blog.goo.ne.jp/maedatakayuki_1943

荒葉一也 Ocini Initiative(時事解説/評論):<http://ocininitiative.maeda1.jp/Commentary.html>

マイライブラリー: 0429

(ニュース解説)いよいよ GCC 解体か?—GCC 首脳会議を振り返って

2017.12.21

荒葉一也

Areha_Kazuya@jcom.home.ne.jp

対カタール断交問題を抱えたままで首脳会談に突入



毎年 12 月に 6 カ国持ち回りで開かれる恒例の GCC 首脳会議は今年で第 38 回を迎え、12 月 5 日(火)にクウェイトで開催されたが、これまでとは様相が大きく異なった。その最大の理由は丁度半年前の 6 月 5 日に GCC 加盟 6 カ国のうちサウジアラビア、UAE 及びバハレーンの 3 カ国がカタールと断交したことである(断交にはこのほかエジプトも参加している)。3 カ国はイランによるシリア、イラク、レバノンでのシーア派のテロ活動をカタールが容認し、またサウジアラビア、UAE 及びバハレーン各国の内政に干渉したことを理由に強硬な断交措置に踏み切った¹。

これまでもカタールのアルジャジーラ TV によるサウド家の報道に関しサウジアラビアが GCC 外相会議で抗議し、あるいは 2014 年にカタールの駐在大使を召還するなど外交問題で軋轢が無かったわけではないが²、いずれの場合も数カ月の冷却期間を経て元のさやに納まっている。しかし今回は断交から半年を経た現在も解決の糸口が見えない。クウェイトが仲介役で奔走し、カタールが協議に応じる姿勢を見せ、ヨーロッパ諸国からも問題の解決を促す発言が相次いでいるが、サウジアラビア外交の鍵を握るムハンマド皇太子は全く軟化する様子を見せない。

首脳出席をボイコットしたサウジアラビア、UAE、バハレーン

議長であるサバーハ・クウェイト首長は当然としても、その他 5 カ国のうち首脳が参加したのはカタールのタミム首長のみであり、他の 4 カ国は全て外相もしくはそれ以下の閣僚の代理出席であった。即ちサウジアラビアからは Al Jubeir 外相、UAE は外務担当国務相、バハレーンは外務副大臣、オマーンは副首相が出席した³。

これまでのサミットではサウジアラビアは国王または皇太子が参加しており、UAE はハリーフ大統領が病弱のためドバイ首長のムハンマド副大統領が、そしてバハレーンはハマド国王自ら出席していた。つまり各国とも No.1 又は No.2 の王族が出席したのである(オマーンも国王が病弱のため毎回 No.2 の王族が出席)。しかし今回サウジアラビアは王族ではないテクノクラートの外務大臣が代理出席、UAE 及びバハレーンに至っては王族である外相をさしおいて副大臣クラスの代理出席にとどまっている。

この顔ぶれではカタールとの外交問題は言うに及ばず、会議直前に飛び出したトランプ米大統領によるエルサレムのイスラエル首都宣言と米大使館移転発言のほか、シリア和平、イエメン紛争など山積する重要案件について意味のある首脳会談などできるはずもない。結局議題すら公表されず、会議日程も当初 2 日間の予定を 1 日で終了、各国の参加者たちはそそくさと帰国したのであった⁴。

匙を投げたクウェイト

カタールと断交中のサウジアラビア、UAE 及びバハレーンの出席者を見ると、これまでのサミットとの落差は余りにも大きく、3 か国が今回のサミットをボイコットしたと見て間違いないであろう。言い換えればホスト国及び唯一最高首脳が参加したクウェイトとカタールに対する甚だしい侮辱とも言える。サウジアラビアのサルマン国王は日本、ロシアなど今年は活発な外交を展開、健康不安説を払拭しており、国内外で活躍している皇太子の二人のどちらかがサミットに出席できたはずである。それにも関わらず両名とも隣国のクウェイトに行かなかったことは、カタールに対する強烈なあてつけともいえる。と同時にうがった見方をすれば多数の王族・閣僚・有力財界人を汚職摘発したことでサウジ国内は大きく動揺しており、国王、皇太子のいずれか一人でも海外に出かければ、宮廷クーデタが発生しないとも限らない。つまり国王と皇太子は自分の首が危ないから国内を離れられないと勤ぐることもできよう。

しかもサミットの前日、サウジアラビアと UAE は 2 国間の軍事・経済パートナーシップ協定を締結しているのである。両国は現在のままの GCC は必要ないと宣言したに等しい⁵。

これまで度々仲介の労を取り何とか GCC の結束を維持しようとしたクウェイト首長も、会議後の談話で、サミットには少なくとも各国とも No.2 が出席すべきであると語り、GCC の機構改革のためタスクフォースを設置することを示唆した。クウェイト首長は GCC の将来に匙を投げたようである⁶。

いよいよ GCC 解体か？



1979年のイラン革命によりホメイニ政権が誕生したことを受けて湾岸の王制国家は1981年に GCC(湾岸協力機構)を結成した。当初はイラン革命の波及を恐れ共同軍事防衛を目的とした同盟であったが、その後各国が石油ブームによる近代国家を目指すようになり、EU型の経済中心の同盟関係に変質していった。

その最初の表れが関税同盟であり、これは何とか実現した。しかし次のステップとして通貨の統一を打ち出すと加盟国の間に隙間風が吹き始めた。2010年にサミットで制度の創設が決定したが、UAE とオマーンは早々と離脱を声明したのである⁷。石油価格高騰の恩恵にあずかれず経済が悪化しつつあったオマーンは経済運営の自由度が制限されることを嫌い、また UAE は EU の例にならって通貨本部を大国サウジのリヤドではなく自国に誘致したいと主張したがサウジが譲らなかったためである。このようにこれまでのサウジ一辺倒の GCC 運営に対して加盟国から異議が出始めたのである。

2011年の「アラブの春」問題によって加盟国間の綻びはさらに広がった。この時政治的にもっとも脆弱であったバハレーンを支えるため、サウジアラビアと UAE を中心とする GCC の合同部隊「半島の楯」がバハレーンに派遣され、イランの影響下にあるシーア派住民を弾圧してハリーフア君主体制を支えた⁸。地政学的理由でイランと良好な関係を維持してきたオマーンは合同部隊に参加しなかった。またカタールのハマド国王(当時)はエジプトのムスリム同胞団幹部の亡命を受け入れてイスラーム運動に理解ある態度を示し、サウジアラビアおよび UAE の不信を買った。それがその後の大使召還(2014年)さらに今回の国交断絶につながるのである。

このような GCC 内の政治的対立がそのまま経済協力問題にも波及し、クウェイトからオマーンに至るアラビア湾縦貫鉄道計画は暗礁に乗り上げ、また VAT(付加価値税)の導入もサウジアラビアと UAE が来年 1 月から導入することを決めたが、他の 4 か国は見通しが立っていない。また今回の対カタール断交でカタールと他の GCC5 か国の通商及び空路、海路の往来はストップしている。GCC 内部の求心力は弱まる一方であり、GCC 解体が現実問題となってきたのである。

今後のシナリオは？

GCC 内部に深刻な対立を抱え、また周辺国でも IS(イスラム国)消滅後のイラク、シリアの情勢、トランプ米大統領によるエルサレム首都容認発言によるアラブ・パレスチナ対イスラエル関係の不安定化、サーレハ前大統領暗殺によりさらに混迷の度を深めるイエメン情勢など GCC は内外に問題山積であり、今後の方向を予測することは極めて難しい。予測をさらに複雑にしているのが GCC の盟主サウジアラビアのムハンマド皇太子の言動である。米国トランプ政権に傾倒し、イランとの対決姿勢を強めている皇太子の外交姿勢は事態の鎮静化とは逆のベクトルを示している。

これまでの推移を総合的に勘案すると GCC6 カ国が従来通りの形で存続するとは考えにくい。懸命な仲介も功を奏さない現状に匙を投げた格好のクウェイト・サーバーハ首長は GCC の機構改革が必要であると説いている。その場合カタールの GCC からの追放または一時的な資格停止が最初の関門となろう。カタール追放に賛同するのはサウジアラビアと UAE であり、事実、両国は一足早く軍事・経済の新パートナーシップ協定を締結し、脱 GCC に向かって突き進んでいる。サウジアラビアに全面的に依存しているバハレーンを含めた 3 国の協力関係は今後深まるであろう⁹。

クウェイトはイラクと直接国境を接し、間近にイランを控え、さらに国内に少なからぬシーア派住民を抱えている。同国は体制維持のためにはこれら 3 か国同盟に参加せざるを得ないであろう。オマーンはと言えば、これまでもサウジアラビア、UAE、カタール間で繰り返されるゴタゴタに対し傍観者的な立場をとっており、一方でイランとも良好な関係を維持したいはずであり、新 GCC では準会員扱いとなる可能性が高い。

こうして現在の GCC はカタールを排除した新たな湾岸安全保障機構に模様替えするものと思われる。但しこれによって湾岸情勢が安定し、それが中東全体にプラスの効果をもたらすと考えるのは早計であろう。GCC は極言すれば地域の強国イラン及びイラクに対し脆弱な湾岸君主制国家群が体制維持のために設立した弱者連合である¹⁰。最近ではサウジアラビアが地域大国の一角とみなされるようになったが、それはあくまで石油という天然資源の恩恵による GDP 大国でしかなく、人的資源、外交、政治制度、

文化等の面ではイラン、イラク、エジプトあるいはトルコをはるかに下回っていることは明らかである。軍備こそ米国製の最新兵器を装備しているが単独ではイエメンの反政府勢力にすら歯が立たないのが現状であり、米国に依存するしかなさそうである。

以上のように分析すると新 GCC は新たな地域の不安定要因になると考えざるを得ないのが筆者の結論である。

以上

1 マイライブラリー0416 (2014.7.24 付け)「カタール GCC 離脱(Qatarexit)の可能性も：カタールとサウジ国交断絶」参照。

<http://mylibrary.maeda1.jp/0416GccDispute2017July.pdf>

2 マイライブラリー0303[サウジアラビア等 3 カ国が駐カタール大使を召還—埋まらぬ GCC の亀裂] (2014.3.9 付け)参照。

<http://mylibrary.maeda1.jp/0303QatarSaudiDispute2014.pdf>

3 “Gulf Cooperation Council Summit opens amid calls for safeguarding GCC” Gulf News on 2017/12/5

<http://gulfnnews.com/news/gulf/kuwait/gulf-cooperation-council-summit-opens-amid-calls-for-safeguarding-gcc-1.2135955>

4 “GCC summit cut short by a day”, The Peninsula on 2017/12/5

<http://www.thepeninsulaqatar.com/article/05/12/2017/GCC-summit-cut-short-by-a-day>

5 “UAE and Saudi form new partnership separate from GCC”, The Peninsula on 2017/12/5

<http://www.thepeninsulaqatar.com/article/05/12/2017/UAE-and-Saudi-form-new-partnership-separate-from-GCC>

6 “GCC structure may have to change: Kuwait Emir”, The Peninsula on 2017/12/5

<http://www.thepeninsulaqatar.com/article/05/12/2017/GCC-structure-may-have-to-change-Kuwait-Emir>

7 マイライブラリー0105「二日間を浪費しただけの第 30 回 GCC サミット」(2009.12.16 付け)

<http://mylibrary.maeda1.jp/0105GccSummit09.pdf>

8 マイライブラリー0175「危機感を露わにする湾岸君主制国家」(2011.4.4 付け)

<http://mylibrary.maeda1.jp/0175GccCrisis.pdf>

9 “Weakened GCC institution struggles for relevance”, MEED on 2017/12/7

<https://www.meed.com/gcc-struggles-for-relevance/>

10 「シマウマとライオンと巨象 「ガルフ」お伽噺」アラビア半島定点観測その 4。「石油文化」2000 年 2 月号掲載。

<http://ocininitiative.maeda1.jp/0109%20SekiyubunkaEssayNo4.pdf>